



Title	臨床哲学の余白 [Vol. 8]
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2001, 8, p. 34-34
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5895
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

夏もすいぶん終わり頃に『春夏号』を発行することになりました。『メチ工』の編集にあたっては、昨年より責任編集制を採り入れ、そのつど編集委員が組まれることになりました。今回もまた、個人名の文章でも細かな表現に至るまで、編集委員によって検討され、合意が得られるまで議論を続けました。こうした議論の過程をどのように紙面に活かすかということが今後の課題です。

7月に院生2名とともにオスロで開かれた第6回哲学プラクティス(Philosophy in Practice)国際学会に参加しました。哲学の教育に関するテーマとしては前回特集した「ソクラティク・ダイアローグ」や「子どもとのための／ともにする哲学」などについて話し合われました。これについては臨床哲学の活動とも関連が深く、次回以降のメチ工でぜひ特集したいと思います。(本間)

研究会開催から『メチ工』発行まで1年半もたってしまったことをまずお詫びいたします。当初から出版の計画はあったのですが諸事情で遅くなりました。改めて原稿をまとめ、大変実践的でしかも深い内容の研究会だったと思います。哲学の教育に関心のある多くの方が読んでくださることを願います。

(畠)

本号冒頭の「この特集について」では、98年度からの「教育班」の活動をまとめています。本年度から、「教育班」は、金曜6限の臨床哲学演習の一分科会へと活動形態が変わりました。メンバーも新旧交替しています。

34

編集者一同は、昨年度までの活動をこのようにまとめ、今後の新たな取り組みにつなげていきたいと考えています。とりわけ今回特集した高校で哲学を教えること、あるいは高校生と哲学することは、本号後半で報告した哲学カフェやセミナーでの対話の実践と並んで、臨床哲学の主要なプロジェクトになりそうです。

私は、本号の編集会議で自分の原稿が検討され、話し合いを重ねて、原稿を書き直しました。それを通じて、自分の受けた印象を伝えるには見聞きした具体的な事柄に基づいて書かなければならぬことを教わりました。(会沢)

この4月から私立高校で非常勤講師をしている。現代社会、倫理、政治経済を担当しているのだ

が、この3科目の中ではやはり倫理が大変だ。現代社会と政治経済は教科書でも十分で、資料も新聞などの切り抜きを使える。しかし、倫理はもともと内容が抽象的で、教科書の記述もドライすぎる。幸福とか、正義という抽象的な概念を生徒の心に響かせるために、それをいかに具体的に語っていけるかが勝負となる。そこで大変なのが資料づくりである。

今、考えているのは、マンガを倫理の授業の資料に使うことである。実際に、秋から、研究室のメンバーと協力して、大阪の府立高校でボランティア講師として10時間分の授業を受け持つことになった。ここでいろいろ試してみようと思う。(森)

臨床哲学の余白